

A Historical Study on the Introduction and Diffused Process of Ski in Ishikawa Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/648

石川県におけるスキーの導入及び普及過程に関する研究

大久保英哲・川崎信和*¹・野中由美子*²

A Historical Study on the Introduction and Diffused Process of Ski in Ishikawa Prefecture

Hideaki OKUBO, Nobuto KAWASAKI*¹, Yumiko NONAKA*²

緒 言

明治44年1月、オーストリアの将校テオドル・エードレル・フォン・レルヒ (Theodor Edler von Lerch) が新潟県高田において高田第十三師団の将校たちや地元の教師たちにスキーの講習を行ったことが契機となり、その後日本各地にスキーが普及していったことは広く知られている¹⁾²⁾³⁾。石川県においては、『石川県スキー連盟50年史』⁴⁾によれば、スキーがスポーツとして始められるようになったのは大正10年とされている。日本にスキーが発祥した明治44年から10年も経っている。では、この10年の間、石川県ではスキーに関して何も活動がなされなかったのだろうか。

石川県におけるスキーの歴史的研究には、山崎による研究²⁾をあげることができる。この研究では、大正から昭和初期における石川県のスキーの歴史を簡単な略史としてまとめ、石川県に最初にスキーを持ち込んだ、当時の石川県師範学校長中山文雄、石川県最初のスキー組織団体である金沢スキー会、高田でスキーを学び、石川県白峰地方において郵便配達に利用することでスキーの普及を行った白峰郵便局長松原伝吉、第九師団におけるスキー活動、そのほか大正11年の医王山遭難事件、大正14年に設立された石川県体育協会と、その年から毎年開催されたスキー講習会、またその会場となったスキー場、昭和8年のスキー大会時の選手遭難事件などが述べられている。しかし、この研究からは、

石川県の昭和初期にかけてのスキー活動の主な流れは理解することはできるが、各史実の典拠が明確に示されておらず、また、各スキー活動の時期特定が曖昧であり、その内容も詳細でないため、山崎が述べるスキー活動はその背景がはっきりと見えない。さらに、第九師団のスキー活動を石川県のスキー普及と結びつけていないため、第九師団のスキー活動を正しく評価できていない等の問題点が指摘できる。

また、このほか石川県スキー連盟が発行した『石川県スキー連盟40年史』⁵⁾『石川県スキー連盟50年史』⁴⁾が先行研究としてあげられる。が、取り上げられているスキー活動は少なく、そこからは石川県におけるスキーの導入・普及過程は明らかにできない。なお、昭和8年に起きたスキー大会時の選手遭難事件については、小川による研究⁶⁾と全日本スキー連盟発行の『スキー年鑑7』⁷⁾中の鶴見、木原、麻生らの報告がある。これらは、この遭難事件の詳細を知ることができるが、石川県全体のスキー活動については述べられていない。

本研究では、日本のスキー発祥の地とされる新潟県高田でスキー活動が始められた明治44年から石川県スキー連盟が設立されることにより石川県のスキー活動が発展期へと移行すると考えられる昭和21年3月までの、石川県地方紙「北國新聞」及び「北國毎日新聞」⁸⁾⁹⁾のスキーに関する記事1,348件を調査し、石川県におけるスキー活動を明らかにする。その際、上述の先行研究に述べられている史実を参考にしながら

平成10年9月16日受理

*¹ 富山県立立山少年自然の家

*² 平成6年度金沢大学大学院教育学研究科修了

ら、これらに検討を加えていく。さらに、参考資料として石川県教育会発行の『石川教育』⁸⁾ 石川県体育協会発行の『石川体育』⁹⁾及び第四高等学校、石川県師範学校、石川県立金沢第一高等女学校、石川県立第二高等女学校、金沢第一中学、金沢第二中学、金沢第三中学、石川県羽咋高等学校の記念誌¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾、白峰村誌、鳥越村誌¹⁸⁾¹⁹⁾等も調査し、当時の学校及び教育会のスキー活動、そのほか県内各地域で行われたスキー活動を明らかにする。また、現地調査として、新潟県高田の日本スキー発祥記念館、高田市立図書館、石川県鳥越村、鶴来町を訪れ、スキー発祥当時の背景や地域でのスキー講習会、スキー製造の背景を理解する材料として参考にしている。

I 石川県におけるスキーの導入

1. 郵便局長松原伝吉が伝えたスキー

石川県の白峰地方では冬になると降雪が多く、付近の郵便局では交通途絶となり、郵便物の集配・遞送が不可能となり、混乱を来した。この救済方法として金沢郵便局では、石川県の白峰をはじめ、福井県面谷、北谷、富山県利賀、平の5局において試験的にスキーを使用することを定めた。しかし、当時はスキーの使用方法を知る者がいなかったため、スキーの本場であった高田へ使用方法を習得させることを目的に人を派遣した。²⁰⁾

大正5年2月中旬、新潟県高田市で開催されたスキー講習会に参加していた松原伝吉が2月28日に帰局した。同日、松原は直ちに金沢局に出向き、習得してきたスキー技術を大乘寺山(現金沢市長坂町)において披露した。〔図1〕²¹⁾ 帰村した松原は、さっそく局員や子供たちに手ほどきし普及に務めた。²²⁾

松原はこの後、大正8年2月に福井県大野、勝山、西谷、阪谷、北谷の5局の郵便局員に対しスキー講習会を行っている²³⁾。松原のスキー普及活動は、白峰村内のみでなく同方面山間部の他の地域にも及んだことになる。しかし、大



〔図1〕白峰村郵便局長「松原伝吉」の滑走振り
(北國新聞 大正5年2月29日)

正7年になるまでは、郵便局関係者以外のスキー活動は確認できていない。従って、松原が高田から持ち帰ったスキー技術は郵便局という局所的な普及をもたらしただけに終わった可能性が考えられる。なお、松原が直接影響を与えているかは、史料が十分でないため言及できないが、大正8年には「白峰村内の家々でスキーを所有していないところはなく、小学児童は大抵スキーを使用して学校へ通う」²⁴⁾までにスキーが普及している。^{註1)}

以上のことから、当時雪に閉ざされていた白峰村を中心とする山間地方に、初めてスキーを持ち込んだ松原の活動は画期的であると同時に、松原以前にスキーを使用した事実が確認できないことから、松原は石川県に初めてスキー技術をもたらした人物として評価することができる。

2. 第九師団におけるスキーの導入

(1) 石川県師範学校からのスキー借用

第九師団におけるスキー活動は、大正7年1月に始まる。第九師団歩兵第35連隊の雪中行軍において、その第一歩を踏むことになる²⁵⁾。歩兵第35連隊は大正7年1月14日屯営地を出発し、石川平野を山地に向かった。鶴来町を抜け、能美郡において天幕露営をし、石川郡を経由して帰還するという雪中行軍であった。その雪中

行軍の途中行った「雪中における諸般の研究」の一つとしてスキーを偵察用に試したのである²⁵⁾。「隊には貧乏でスキーがないので師範学校から偵察用に二つ借りていったが非常に成績が良かった。雪の降らない土地は仕方がないが幸い雪の降るところで、雪の降るところの兵が雪の降るような戦場へ遣られるとすると此等大いに研究し発達させる必要がある²⁵⁾と、雪上での効率的な戦法の研究が必要であると述べ、スキーを試験的に使用している。

この師範学校から借りてきた2台のスキーは、当時、師範学校長であった中山文雄が導入したものであった。中山師範学校長は明治44年に新潟県から石川県師範学校に転任した²⁶⁾。その際、「雪国の冬はスキーに限ると断じ、スキー数台を購入して、生徒の有志にこれを練習させた²⁷⁾とある。師範学校にはスキーが数台あったのである。師範学校では、第九師団による雪中行軍が行われる1週間ほど前にスキー練習が行われている²⁸⁾。しかし、山崎の研究によれば、当時師範学校では、スキーの指導者がいなかったため、ほとんどとっていいほどスキーは行われていなかったようである²⁷⁾。実際にほとんど利用されていなかったとしても、この第九師団の雪中行軍で使用されたことによりその必要性が認識され、以後第九師団のスキー活動を活発化させる契機となったことを考えれば、中山師範学校長が導入したスキーは重要な役割を果たしたと言える。

(2) 民間へのスキー普及の兆し

さらに、第九師団島野副官は大正8年12月「金澤にも是非スキー練習会を設けたい²⁹⁾という意向を示し、師団内のみでなく民間側へも公開したスキー講習会を将来的に開催する構想を練り始める。それは「今年には是非とも民間側に対しスキー術の普及を行ひ将来は金澤スキー倶楽部をも組織したい³⁰⁾という発言から明らかである。軍関係者から民間側へのスキー普及の試みは、これ以前に新潟県高田においてみられ

る。高田では、スキーが伝えられた翌年から既に高田師団によって民間へのスキー講習会が開催されている。³¹⁾第九師団もまた高田同様、民間へのスキーの普及に積極的な姿勢を見せ、石川県のスキー活動全体の中心的存在となっていく。

(3) スキー隊の編成

第九師団ではいよいよスキー隊を組織し、スキーの本格的軍用化を図る。大正9年にはスキーを高田へ注文し³³⁾、スキーの到着を機に各隊の将校8名を募り、野田山においてスキー術の練習を行った。この練習でスキー術を習得した将校は、後にスキー専修員として各所属隊のスキー術の教官となり、今後更に多数のスキーを購入し、スキー隊を編成するという計画であった。また、民間側への普及宣伝をも目的に加えていた³⁴⁾。

大正10年1月末には高田から50台のスキーが到着し、約50名の規模からなるスキー術の練習を行うことを決定する³⁵⁾。その後、約50名のスキー隊は大乗寺山において猛烈な練習を続けた³⁶⁾。また、鯖江第36連隊からは、このスキー術を学びスキー教官の資格を取ろうと、2名の将校が第九師団のスキー練習に加わっている³⁶⁾。

このように、大正10年には50台にもものぼる大



〔図2〕第九師団のスキー練習
(北國新聞 大正9年1月24日)

量のスキーが購入され、第九師団スキー隊の規模も拡大している。〔図2〕

(4) 医王山遭難事件

大正9年2月、第九師団の日澤大尉以下スキー将校8名と、村井訓導及び第四高等学校の学生をはじめとする学校側からの参加者6名、総勢14名のスキー隊が医王山越えを試み、遭難するという事件が起こる³⁷⁾。スキー隊の一行は、大正9年2月14日、師団司令部前へ集合し、師団長の訓示を受け、金山参謀長の「今度の壮挙はその成功と否とに依ってスキーの将来に及ぼす影響實に甚大なるものがある。この意味において諸君の責任は決して軽くない。」³⁸⁾との激励を受け出発した。スキー隊は同15日医王山を越え福光(現富山県西砺波郡福光町)に到着する予定であったが、冬の雪山で遭難し、福光に到着することができなかった。15日夜にはスキー隊が行方不明と伝えられ、福光町では師団の金山参謀長、春山高級副官が対策を練った。また、福光消防組合等が捜索隊を編成し山麓へ急行、そのほか師団からは35連隊が出動、電話隊までも加わり臨時回線を引き、さらには地元青年団、軍人分会等も加わり夜通しで大捜査が行われた。その甲斐あって、16日早朝、捜査隊がス

キー隊一行と遭遇し、午前8時半、富山県の西太美村に一名の犠牲者も出すことなく全員無事に到着した。³⁹⁾〔図3〕

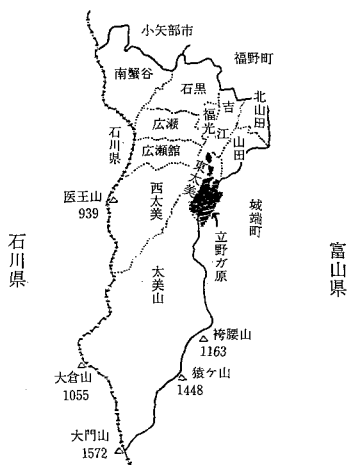
この事件は「一時世間を騒がしたとはいへ、数千尺の雪の山でも、スキーで行けば易々たるものであることが、これに依って県人の脳裏に、いやが上にも深く感銘させた。スキーは危険なものであるといふ消極的な宣伝よりも、却ってスキーの効果の偉大さを十分に知らしめ得たことは、この医王山突破の賜であり、この壮挙は、少々無謀であったとはいへ、スキー普及発展上、実に貢献するところ大なるものがあつた。」⁴⁰⁾と書かれている^{註2)}。この事件は、連日紙面を大々的に賑わし多くの人々の関心を引き起こし、スキーに関する大きな宣伝効果があつたと思われる。この事件を機にスキー使用の効果が理解されたのか、先に述べたように、第九師団のスキー隊は以後大規模化の方向へ向かう。また、この事件を起こしたスキー隊の中には村井訓導をはじめ四高生徒も含まれており、教育界側へ与えたスキーの影響も大きく、石川県全体のスキー活動も大きな広がりを見せ始める。

3. 教育界へのスキー導入

(1) 最初のスキー練習

石川県教育界のスキー活動は、山崎によると、先に述べた石川県師範学校長が新潟県から転任してすぐにスキー教台を購入したことが始まりであるとされている。しかし、「當時師範学校には、これを指導する人が無かつた為に、たゞ運動場の平地行進や、小斜面の滑降位に止まつて、更に上達の色は見えなかつたらしい」^{41)註3)}。また、当時の新聞にも師範学校でスキーが行われたことは記載されていない。では、石川県教育界において、確かな技術と共にスキーの練習が実施されるのは、いつであろうか。

そのスキー活動が確認できるのは大正7年からである。大正7年1月12日の新聞によると「男子師範学校にては今回第一中学校の山岸教諭を



〔図3〕 医王山付近位置図
(『福光町史』¹²⁰⁾より)

聘し同校運動場に於て職員生徒のスキー練習を開始したるが何分生徒らは珍しき事として熱心に練習を励みつつあり」⁴²⁾とある。第一中学校から招かれ指導に当たった山岸教諭は、当時の教員の中でも確かな技術を持った指導者であったと考えられる。しかし、この山岸教諭がいつどこでスキー術を習得したのかは、現在明らかになっていない。〔図4〕



〔図4〕 大正初期石川県師範学校のスキー
（『石川県師範教育史』, 175頁）

以上のことから、石川県の教育界において、指導者を伴ったスキー練習が行われた最初として確認できるのは、この大正7年の男子師範学校でのスキー練習であり、このスキー練習が石川県教育界におけるスキー活動の始まりであると見られる。

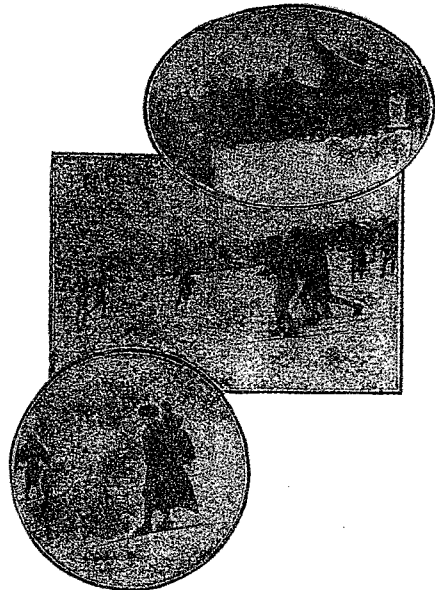
（2）スキー講習会への教員の参加

その後、大正8年12月29日には、高田市において高橋翠郊氏を講師として開催されたスキー講習会に、石川県から金井視学官をはじめ中等学校の体操教師が2、3名出席している⁴³⁾。この講習会への参加は、第九師団の島野副官が金井視学官に勧め、金井視学官がそれに賛同して実現したもので、石川県にスキー倶楽部を設立することをも見越してのことであった⁴³⁾。また、この講習会は、一般学校職員を対象として参加の募集を行っており⁴⁴⁾、教育界へのスキーの普及を目的とした講習であった。そして、この講習会へ参加した教員たちが帰ってきた大正

9年から、石川県教育界のスキー活動は活発化していくことになる。

（3）女子生徒のスキー活動

大正9年1月22日、石川県女子師範学校では冬期間の運動としてスキーを取り入れ、高田において講習を受けた同校訓導兼第二高等女学校教諭村井又三郎氏が指導者となり、校長はじめ教諭たちもスキー術を学んだ。また、同校では女生徒の練習希望者が多く、スキー部を組織しようとして熱心に練習に励んだ⁴⁵⁾。村井訓導は女生徒を引率して野田山でスキー練習も行っている。〔図5〕この野田山での練習は「女子のスキー登山などおそらく当地方ではこれを持って嚆矢とするでせう」⁴⁶⁾と新聞の中で評価されたほどである。さらに、附属小学校においても4年生以上の児童に対し、スキーの練習を開始している。また、この年、第二高等女学校と女子師範学校においてスキー実習が始まった（女子師範と第二高女は当時同じ敷地内にあり校長も兼任していた）。この実習は「当時の女学校教育の中では、雪中遠足と並んで異色の行事であっ



〔図5〕 女子師範、二高女生徒のスキー練習
（北國新聞 大正10年2月7日）

た。すでに四高や金沢医専、男子師範の生徒の中にはスキー愛好者がぼつぼつと現れ始めていたが、女性でスキーに挑戦するなど考えも及ばなかったころである⁴⁷⁾と言われ、女子生徒が活発なスキー活動を行っている。これは、北陸の他県と比較すると、早い時期から女子生徒がスキー活動を行っており、石川県のスキー導入期の特徴であるといえよう。高田で講習を受けた一人である村井訓導が、女子師範学校及び第二高等女学校の教諭であったことの影響であろう。そして、この村井訓導は、その後も石川県のスキー普及に尽力し、中心的な役割を担っていく。

II 石川県におけるスキーの普及

1. 「金沢スキー会」の創立

新潟県高田市から金沢へと伝わったスキーであったが、第九師団では雪上での行軍力に着目し、また各学校においても冬期間に適した運動として評価され、加えて、スキー隊の医専山遭難事件など思わぬ事件によって注目され、石川県のスキー熱は高まっていった。

そして、大正10年2月6日、予てから切望されていた「金沢スキー会」が創設されることとなる⁴⁸⁾。大正8年12月に金井視学官らが高田のスキー講習会に参加した当時から構想があった金沢のスキー組織であるが、それから1年以上の歳月を経てようやく創設に至った。創設される前年の大正9年1月には、第九師団の島野副官は次のような意向を述べている。「今年は是非とも民間側に対してスキー技術の普及を行ひ将来は金沢スキー倶楽部を組織したい³⁰⁾。「幸い四高、医専等各学校生徒中に二、三十人の同好者があるので、コレを狩り集めて一団を作りスキーの本場を近く高田から金沢へ奪い取らうと計画中³⁰⁾と、積極的な組織作りを計画していた。

大正10年1月15日からの北國新聞には、スキー会委員村井の名で「『スキー術』について」と題され、スキーの種類、スキーをするときの服

装、スキー術等について、6回に渡り詳細なスキーの紹介が連載された⁴⁹⁾。スキー会委員村井は高田で講習を受けた村井訓導である。そして、この紹介記事は、スキーの普及を図ろうとしたものであるとともに、金沢スキー会の宣伝をも目的として兼ねていたと考えられる。

こうして、金沢スキー会の発会に至り、大正10年2月6日雪晴れのもと大乘寺山において、師団から神戸少将、高田から高橋翠郊氏を招き、会員80名が集い、発会式が執り行われた。

金沢スキー会の活動は、大正10年2月7日の新聞で伝えられているように「雪は熾に降り、スキーの練習は火のついたやうに猛烈に行われてゐる大乘寺山では昨今第九師団の選手将卒約六十名、金澤スキー倶楽部員約百名、それに第二高等女学校や女子師範学校の女生徒連で彼は三百名弱のスキー家が星の冴ゆる頃まで滑走したり転んだりして熱心に練習してゐる⁵⁰⁾と、大規模な練習会であった。

しかし、このスキー練習の大規模化の裏で、新たな問題が生まれていた。スキー練習が盛んに行われる大乘寺山付近の各村落の農夫たちが、余りにも多くの人たちが滑走するので、雪に埋もれているとはいえ、その下の畑が駄目になってしまうと苦情を言い始めたのである⁵⁰⁾。この苦情はまず第九師団に向けられ、第九師団では練習場所の変更などにより対応した。その翌年からは、こうした苦情への対応は、金沢スキー会が中心となって処理することになり、大乘寺山付近一帯の地主からの承諾を得て、会員に練習を許可するなどの対応を行った⁵¹⁾。

また、金沢スキー会は、大乘寺山下の民家にアイロン、蠟等の設備を整え、暖房や携帯品預り所の設置も行い、更に会員に対しスキーの貸与を行う等、細かな活動も行うようになった⁵²⁾。

北國新聞に記載された記事によると、金沢スキー会は大正11年2月にスキーの宣伝と技術者の養成を目的として、各郡部でもスキー講習会を開催する計画を立てていた⁵²⁾。が、以後、そ

の活動を報告する新聞記事は確認できなかった。

金沢スキー会は、多くの会員を得て活発に活動していたかに見えるが、実際は「スキー会を改善してその指命を完ふせよ」という題で、その活動に批判的な意見もみられる。金沢にたった一つしかないスキー団体であるにも関わらず、その活動はわずか20台ばかりのスキーを有志に貸し出すというものでしかなく、また、大乘寺山付近の村民との交渉も十分なものではない。これではその使命を果たしているとはいえず、現在の会の組織を改造し、会費を集めるなどして、さらなる活動を希望するというその活動の消極性を批判する意見であった。⁵³⁾

これが、金沢スキー会の限界であったのだろうか。大正13年2月には村民との協調がうまくいかず、後に金沢スキー会、四高旅行部、石川県教育委員会の三者が協力して開催する計画であったスキー大会も中止に終わった⁵⁴⁾⁵⁵⁾。また、これを受けて、大乘寺山を買収もしくは冬期間だけでも借り受けるという決定もなされたが⁵⁶⁾、その事実を確認できる史料は発見できない。さらに、大正14年1月には、金沢スキー会主催のスキー競技会も計画されていた⁵⁷⁾が、これも実際にスキー競技会が開催されたかどうかは確認できない。

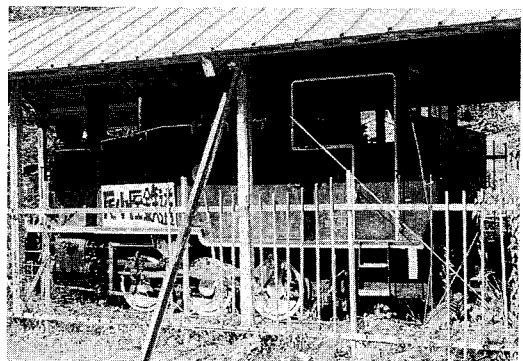
以後、金沢スキー会に関する新聞記事は見られなくなる。しかし、この金沢スキー会は当時のスキーに対する人々の関心を反映したものであり、金沢スキー会の創立は、石川県のスキー活動を導入期から普及期へと移行させていく上で大きな役割を果たしたといえる。

金沢スキー会創設以後、昭和初期にかけて、石川県には様々な地域のスキー組織団体が創設される。能美郡西尾村尾小屋スキー倶楽部⁵⁸⁾、金城スキー倶楽部⁵⁹⁾、白山スキー倶楽部⁶⁰⁾、鶴来谷スキー倶楽部⁶¹⁾、石川県庁スキー倶楽部⁶²⁾、輪島スキー倶楽部⁶³⁾、山中温泉スキー倶楽部⁶⁴⁾、金沢スキー協会⁶⁵⁾、山代温泉スキー倶楽部⁶⁶⁾、小松スキー倶楽部⁶⁶⁾、白熊クラブ⁶⁷⁾、

越路スキークラブ⁶⁸⁾、小松ホワイトベアスキー倶楽部⁶⁹⁾、粟津温泉スキー倶楽部⁷⁰⁾、北鳳スキー倶楽部⁷¹⁾、董臺スキー協会⁷²⁾、湯涌温泉スキー倶楽部⁷³⁾、七尾スキー倶楽部⁷⁴⁾、能美郡辰ノ口(北部)スキー倶楽部⁷⁵⁾、鳳至郡三井スキー倶楽部⁷⁶⁾、羽咋スキー倶楽部⁷⁷⁾等数多くのスキー団体が組織され、各地域においてスキー講習会の開催、スキー場の開設、各種スキー大会の開催、体育協会への加盟等様々な活動を展開し、各地域でのスキーの普及に務めている。

2. スキー講習会

石川県全県規模のスキー講習会は大正12年1月に初めて開催される⁷⁸⁾。この講習会の開催について大正11年12月19日の新聞は「最近縣下におけるスキー熱が勃興したので一層その普及を図る目的を以て石川県教育会主催にて来る一月下旬頃雪の医王山に於て縣下で初めての壮快なるスキー講習を開設することとなった」⁷⁹⁾と伝えている。これは、石川県教育会主催の第1回スキー講習会で、大正12年1月23日から27日まで、能美郡鳥越村字阿手(現在は石川郡)の阿手小学校前の畠地から山にかけての斜面を利用して実施された⁸⁰⁾。全県から参加者を募ったことにより、開催地能美郡をはじめ、江沼郡、石川郡、河北郡、羽咋郡、鹿島郡、鳳至郡、珠洲郡、金沢市の多方面からの参加者があった。参加者の一行約30名は、1月23日、北陸線で小松



〔図6〕旧尾小屋鉄道(小松市)

へ行き、尾小屋行ききの軽便鉄道2両に乗り換えて約2時間後に尾小屋に到着した。〔図6〕尾小屋の鉱山事務所で昼食後、溶鉱炉わきから採掘トンネルをカンテラを手に1時間ほど歩き、午後1時半、阿手に着いた。阿手の民家3軒に旅装を解いて午後2時、阿手小学校(現在は廃

資料1 石川県教育会主催 第1回スキー講習会 講習内容

- 〔第一日目〕経験者グループ：山脚滑走(山右、山左)、テレマーク滑走、
テレマーク回転、生地行軍(急斜面における電光形斜登行と同方向変換)
初心者グループ：斜登行(山右、山左)、堰登行、山脚滑走(山右、山左)、転倒停止法
- 〔第二日目〕経験者グループ：普通停止、操舵クリスチヤニヤ、生地行軍、
テレマーク制動、屈伸滑降、ジャンプ用屈伸姿勢
初心者グループ：普通停止、生地行軍、斜滑降(山右、山左)、
山膝滑降の斜滑降、擲付付登り
- 〔第三日目〕経験者グループ：緩動クリスチヤニヤ、普通クリスチヤニヤ、
急動クリスチヤニヤ
初心者グループ：直滑降、シヤステージ、デミシヤステージ(山右、山左)、
右方向転換及停止法
- 〔第四日目〕経験者グループ：谷クリスチヤニヤ(逆クリスチヤニヤ)
初心者グループ：テレマーク滑走並停止、各種のクリスチヤニヤ、
テレマーク制動並停止

資料2 石川県教育会主催 第1回スキー講習会 参加者氏名

〔講習員〕

江沼郡山中小学校訓導	香川 潤
能美郡史貞	齋田孝正
同 高等女学校教諭	井口秀一
同 小松商業学校教諭	藤田亮一
同 豪城小学校訓導	藤田秀光
同 同	石黒助太郎
同 同	遠藤信一
同 尾小屋補習校助教諭	下中庄次郎
同 尾小屋小学校訓導	上出徳之
石川郡三馬小学校訓導兼校長	北村金二
同 野々市小学校訓導	安田喜雄
同 郷補習校助教諭	上田永百
河北郡浅川村補習校助教諭	北川與吉
同 賢王山小学校訓導	高田勝治
同 大浦小学校訓導	塚本宇太郎
同 外日角小学校訓導	岡田外吉
羽咋郡羽咋尋常小学校訓導	杉野椿作
鹿島郡鹿島路小学校訓導	眞田嘉祐
同 御祖小学校訓導	戸部忠夫
同 鳥屋小学校訓導	北村 力
鳳至郡教員養成所助教諭	中濱幸吉
同 輪島女児小学校訓導	菊池登郎
同 穴水小学校訓導	宮永亮太郎
珠洲郡史貞	宮下儀一
同 蛸島小学校訓導	明星久光
金澤市材木町小学校訓導	荒井幸太郎
金澤第三中学校教諭心得	赤井久雄
金澤第一高等女学校教諭	北村伊三郎
七尾商業学校教諭	越島義男

〔参加員〕

尾小屋鉱山事務所	小林乙松
同	越田莊太郎
同	佐藤一雄
第四高等学校学生	伊比忠夫
堀田運道具商店員	西田利作

石川教育 第227号(大正12年3月)pp.36~39より

校)前の畠地で練習を開始している⁸⁰⁾。講習会は、参加者を既にスキーに経験のある者と、初体験の者との2グループに分けて行われ、講師としてスキー経験者のグループに石川県石川郡金石小学校長村井又三郎、初心者グループには新潟県高田師範学校訓導原豊次氏が担当した。講習日4日間の練習内容は(資料1)のとおりである。

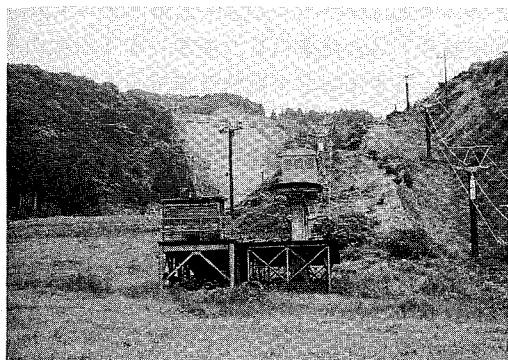
尾小屋鉱山事務所や地元の人々の協力があり、講習会は大成功のうちに終わった⁸⁰⁾。(資料2参照)このように尾小屋鉱山事務所の協力が代表されるように、スキー講習会の会場となった土地は、当時尾小屋鉱山が栄えた場所であり、スキー講習会は鉱山関係者の協力があって成功に至っている。石川県のスキー普及の陰には、こうした鉱山繁栄の関係も無視できない。〔図7〕



〔図7〕阿手鉱山跡(鳥越村)



〔図8〕第2回石川県教育会主催スキー講習会(北國新聞 昭和2年1月26日)



〔図9〕五百峠跡（現大倉岳スキー場）

資料3 石川県教育会主催 第2回スキー講習会 参加者氏名

〔講習員〕

- | | |
|--------------|--------|
| 江沼郡錦城小学校訓導 | 吉尾賢信 |
| 同 山中小学校訓導 | ○中根 瀏 |
| 能美郡青年団主事 | ○齋田孝正 |
| 同 小松商業学校教諭 | 伊関吉治 |
| 同 芦城小学校訓導 | ○藤岡秀光 |
| 同 長野小学校訓導 | 渡邊知重 |
| 同 今江小学校訓導 | 小坂清作 |
| 同 松岡小学校長 | 富村榮吉 |
| 同 小松町青年団員 | 蓮田健治 |
| 石川郡米丸村青年団員 | 村田彌八 |
| 河北郡中條小学校訓導 | 竹口二三郎 |
| 同 下田上小学校訓導 | ○北川與吉 |
| 羽咋郡羽咋小学校訓導 | 加藤時雄 |
| 鳳至郡書記社会係長 | 中島清作 |
| 鳳至郡輪島男児小学校訓導 | 深岡 堯 |
| 同 穴水小学校訓導 | ○宮永亮太郎 |
| 同上 | 橋本秀春 |
| 同 樺比小学校訓導 | 川島勝太郎 |
| 珠洲郡蛸島小学校訓導 | 明星久光 |
| 同 松波小学校訓導 | 船元正一 |
| 大聖寺中学校教諭 | 一盛一佐八郎 |
| 小松高等女学校教諭 | ○井口秀一 |

〔参加員〕

- | | |
|------------|--------|
| 尾小屋鉱山事務所職員 | 宮下竹治 |
| 同 | ○越田莊太郎 |
| 同 | 田中作治 |
| 同 | ○佐藤一雄 |
| 堀田運道具店員 | ○西田利作 |

○印は第1回参加者

石川教育 第251号（大正14年3月）pp60～61より

翌年は降雪が少なく、講習会は中止になったが、その翌年大正14年1月には第2回の石川県教育会主催スキー講習会が尾小屋の五百峠（現在の大倉岳スキー場付近）において開催された⁸¹⁾。〔図8, 9〕(資料3参照)

3回以降には石川県教育会主催のスキー講習は見られないが、石川県体育協会がその後引き継いだと思われ、大正15年には第1回の石川県体育協会主催スキー講習会が開催された。その後は、石川県体育協会と各地域の組織団体の共

同主催という形で多くのスキー講習会が行われ、その回数は昭和初期にかけて14回にもものぼる⁸²⁾。

また、石川県内各地域のスキー団体が主催してスキー講習会も行われている。昭和4年には、鶴来町において石川県で初めて警察によるスキー講習会が行われた。「鶴来警察署では近時スキーの利用発達とともに山間部に多数の巡査を駐在せしめるため実際にスキーを応用することの交通機関途絶等の場合に切実なるものがあるため六日署員定期講習日を利用して全署員のスキー練習を鶴来スキー場で行ふ」⁶¹⁾とある。スキー活動の普及が警察という組織にまで及んだのである。

昭和8年1月21, 22日には羽咋郡において羽咋郡第一教育研究会主催のスキー講習会が開催される⁸³⁾。小学校教員のほか各村有志ら百余名が参加し、大盛況であった。この年羽咋郡では、1月28, 29日に羽咋第四部教育研究会主催のスキー講習会が、2月3, 4日には羽咋第三部教育研究会主催のスキー講習会が開催されている⁸⁴⁾。この2月の講習には、羽咋小学校長村井又三郎が講師として招かれ、教員へのスキー指導を行っている。このように、羽咋郡において盛んにスキー講習会が開催されるようになった背景には、この村井又三郎の羽咋小学校転任があると考えられる。村井は、在籍する地域で、スキーの普及活動に尽力し、石川県のスキー活動の発展に大きく貢献した人物である。

さて、石川県体育協会が主催する講習会も、第1回開催当初は参加者が30名ほどであったのに対し、昭和10年頃になると参加者は100名を越える勢いになる。これは、石川県においてスキーが一定程度普及してきた証であると考えられる。このように、スキー講習会への参加者規模が拡大し、スキーの普及がなされてきた背景には、第1回石川県教育会主催のスキー講習会から、石川県内の幅広い地域より参加者を募ったこと、募集する参加者の対象が各学校、地域の指導的立場にある人たち中心であったこと等

があげられる。講習に参加した人たちは各地域へ帰り、今度は地域の人たちにスキーを指導する立場となり、講習会を開催した。また、教育関係機関が開催するスキー講習会が圧倒的に多かったことから、学校のスキー活動も盛んになる。

このように、スキー講習会は、石川県内の地域や学校においてスキー活動を普及していく上で、大きな役割を果たしていたといえよう。

3. 教育界におけるスキー活動

(1) 女学校のスキー活動

導入期からそうであったように、石川県では早くから女子生徒のスキー活動が行われていた。県内でも第四高等学校、石川県師範学校、金沢医学専門学校等の学生たちのスキー活動は盛んであったが、特に石川県内の学校の中で年中行事にスキー実習を初めて取り入れた第二高等女学校や女子師範学校では、活発なスキー活動が展開された。このスキー実習は大正9年の冬から始まったのであるが、その後も実施され、大正11年1月に実施されたスキー実習の様子は、次のように報告されている。「女子師範学校、第二高等女学校生徒五百名は五十嵐教諭以下二十五名の男女教員に引率され十九日午前九時雪を蹴る靴音高く本多町より百姓町を経て菊橋を渡り野村に出で此所よりスキー隊は橘喜平、宮尾てへ子、三輪英子、近藤光子、の諸職員とともに百余名は『どうせ滑るなら雄大に滑れ北陸女性の踏む雪よ！』と若き女は高らかに歌ひ足並み揃えて滑走の音も勇ましく大乘寺山に登りゆく」⁸⁵⁾。500名にもものぼる女子生徒を引き連れての大々的なスキー実習であった。また、大正15年1月に実施された第二高女のスキー練習では、大乘寺山へ行くために貸し切り電車を借りる騒動であった⁸⁶⁾。さらに、第二高女には備え付けのスキーが100台確保されていたが、これらは休日には不足してしまうほどであったという。この第二高女は当時、金沢市で最もスキー活動の盛んな女学校であった。「北陸

の女は冬期は家の中にもて小さな感情ばかりに囚はれて引込み思案になりやすいから白皚々たるスロープを滑らして壮快な気分を養成するのである。」という学校の趣旨を掲げており、校長も大いにこれを奨励していた⁸⁷⁾。

また、このほか、昭和5年には第一高等女学校にもスキー実習が取り入れられている⁸⁸⁾。

以上のように、第二高女をはじめとして金沢の女学校では、スキー活動が他の学校に勝る勢いで行われていた。大正13年、当時第二高女4年の腰野美代子はその当時のスキー練習の様様を「スキー」と題して次のように書き残している。

「あらっ。また転んじゃった。まるではずみを食らった大きなまりのようにいやという程打ちつけられた。今度こそはと意気込んで見たんだけど……。左右には矢張り同じ様子の友が顔をしかめて転がっている。そして余りおかしくてとうとう吹き出してしまった。私たち二人はいいかげん尻餅にも厭きてどっかりと雪の上に座った。羽織も袴もびしょびしょだ。思い出したように『なんて綺麗な空ね』と友がつぶやく。……スキー。雪国の人にもみ許された特権のこの競技、私どもはうれしさを禁じ得ない。冬晴のこのスキーこそ、暗うつな北国の冬を、動的な明るい色紙の満ちた冬に導く。」⁸⁹⁾

(2) スキー大会の開催

第四高等学校においては、石川県にスキーが広まり始める以前から、スキーの本場である関へ出かけたり、第九師団とともに医王山越えを行う等の活動が見られた。県内にスキーが普及し始める大正11年になると、第四高等学校では新たなスキー活動が見られるようになる。それは、石川県で最初のスキー大会の開催である。大正11年1月29日、第四高等学校旅行部によって大乘寺山でスキー大会は開催された。大会種目には、決勝点に到達するまで2時間を要する長距離走をはじめ、滑走中に蜜柑を手早く拾ってゴールする蜜柑拾い競争、戴囊、連鎖、障害

物競走、小学校選手競争等が行われた⁹⁰⁾。そして、このスキー大会には、来賓として高橋翠郊氏が招かれた。高橋は、1年前の金沢スキー会の発会式にも来賓として招待されており、彼は1年前のスキー会会員たちの滑りと今回のスキー大会に参加した選手達の滑りを比べて、次のような感想を語っている。「決勝三四回の競技会だけで一般を批評するのは困難ですが曾て一昨年の金澤スキー会の発会式にこの地の人々の滑走ぶりを拝見して一二の角ばった癖があると思つて帰りましたが二年後の今日会員でその他の大乘寺山に御集まりの人々の滑走振が角が取れて圓く見える幅が広く深みもあるとして滑走者が如何にも雪を理解し温かい心で自らの技術を信用して理論と実地の動作とがシツクリ合つて余裕が出来た事は驚くべき長足の進歩です。私がこうした愉快的驚異を感じ得たのは先年小樽へ参りまして彼地の人々の滑走振りを観たときとこれで二度切りしかありません金澤を中心とした加越能の雪△者の前途是非常なる期待を以て全国的レコードが作らるる日を待ちませう特に婦人の滑走も拝見しました女学生ですが技術は兎も角放膽な温みのある点に於て進歩の見込みは充分であります。」⁹¹⁾この高橋の言葉からは、金沢のスキーの技術は、なお進歩の余地はあるが1年間で目に見えて上達しており、また、特に女学生が恐れることなく大胆にスキーに取り組んでいることが高く評価されている。

この四高主催スキー大会が開催された同日、城南野村練兵場では金沢市の各小学校教員約180名が集まり男女教員運動会が開催されていた。この運動会種目の中にはスキー競技も含まれていた⁹⁰⁾。教員間でのスキー活動も規模が拡大していることがうかがえる。

さて、このように大正11年から始まった四高のスキー大会は、その後大正15年まで続けられた。また、大正10年から実施されていた関温泉でのスキー合宿と講習会は昭和15年まで続けられた⁹²⁾。そして、四高から始まったスキー大会は、県内の各地域や学校へも波及し、昭和4年

頃からは県内の様々な地域で、各地のスキー団体や教育組織等によってスキー大会が開催されるようになる。さらに、大正15年以降は石川県体育協会が中心となり、全県規模のスキー大会が開催される。また、昭和3年からは石川県体育協会が主催する明治神宮スキー競技石川県予選大会が開催される⁹³⁾。この大会によって、石川県のスキー選手たちには全国大会への道が開かれたことになる。このように、石川県のスキー活動は次第に競技志向へと向かい、各地で大会が開催され、大会は全県規模にまで拡大し、全国大会への参加も可能になった。このような数多くのスキー大会の開催及びスキー大会の大規模化は、石川県におけるスキーの普及を示すものであった。また、(資料4)からもわかるように、県内でのスキー大会開催は教育関係者によるものが多く、教育関係者のスキー普及への関心と努力がうかがえる。(資料4 大会年表参照)

このように県内各地でスキー大会が盛んに開催される中、昭和8年に大きな事件が起こる。それは、全日本スキー選手権大会兼第4回近県スキー競技大会で起こった選手遭難事件である。スキー競走中に金沢市立工業生2名、金沢二中生1名が遭難し、死亡する大惨事となった⁹⁷⁾⁹⁴⁾。しかし、この事件が教訓となり、以後スキー大会はその運営が見直され、大会の運営及び出場する際の諸注意などが徹底されるようになる⁹⁵⁾。事件によってスキー活動が消極的になることはなく、さらに改善・整備がなされて、それまで以上に規模が拡大し盛況を呈していた。

(3) スキー活動の各学校への普及

学校へのスキー導入当初から石川県においては、四高、女子師範、第二高女、石川師範、医専等の学校でスキー活動が盛んに行われてきた。スキー活動が導入期から普及期へ移行する大正10年以降はいっそう石川県内様々な学校でスキー活動が見られるようになる。

資料4 石川県において開催されたスキー大会年表
(大正11年～昭和21年1月)

年月日	スキー大会の概要
大正11年 1月29日	第四高等学校旅行部主催のスキー大会が大乗寺山で開かれる。(註:T11,1,30)
大正12年 1月21日	第四高等学校旅行部主催の第2回スキー競技大会が大乗寺山で開かれる。(註:T12,1,22)
大正13年 2月10日	第四高等学校旅行部主催の匠王山スキー大会が匠王山で開かれる。(T13,2,7)
大正14年 1月	第四高等学校旅行部主催の匠王山スキー大会が開催される。(註:p341)
2月1日	第四高等学校旅行部主催の匠王山長距離スキーレース大会が開かれる。(註:p341)
大正15年 1月27日	城南大乗寺山において石川県体育協会主催のスキー大会が開かれる。(註:T15,1,28)
2月	第四高等学校主催のスキー大会が大乗寺山で開かれる。(註:p341)
2月14日	尾小屋スキー倶楽部主催によるスキー競技大会が五百峠にて行われる。(註:T15,2,17)
昭和2年 1月	金沢三中にて第1回校内スキー競技大会が開かれる。(註:p77-78)
石川県体育協会主催の石川県スキー大会が開かれる。(註:p77-78)	
昭和3年 1月22日	石川県体育協会主催の明治神宮体育会スキー競技予選および石川県スキー競技大会が鶴来石切小原スロープにて開かれる。(註:S3,1,24)
2月12日	金沢市初等教育研究会主催の第1回児童スキー大会が大乗寺山スロープで行われる。(註:S3,2,13)
昭和4年 2月3日	能美郡西尾村青年団主催、尾小屋スキー倶楽部後援のスキー競技大会が五百峠にて開かれる。(註:S4,2,5)
2月	輪島スキー倶楽部主催で2月1日曜日、久手川のスキー場で第1回能美スキー大会を開催する予定。(註:S4,1,23)
2月9日	金沢市小学校尋常科児童スキー競技大会が開かれる。(註:S4,2,10)
2月10日	金沢市高等科児童第2回スキー大会が大乗寺山スロープで開かれる。(註:S4,2,12)
2月10日	金沢市教育会主催の第1回金沢市教員スキー大会が大乗寺山スロープで開かれる。(註:S4,2,12)
2月10日	石川県体育協会鶴来町合同主催の第1回スキー競技大会が大乗寺山スロープで開かれる。(註:S4,2,12)
2月24日	山中温泉スキー倶楽部主催の第1回スキー大会が山中温泉栢野スキー場で開かれる。(註:S4,2,17)
昭和5年 1月12日	山中温泉スキー倶楽部主催で山代温泉スキー大会が山代温泉スキー場で開かれる。(註:S5,1,14)
1月26日	第5回明治神宮体育会スキー競技石川県予選第2回近県スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。(註:S5,1,27)
1月27日	金沢市教育課主催の第3回金沢市内小学校児童スキー競技大会尋常科の部が予定されている。(註:S5,1,18)
2月2日	第3回金沢市内小学校児童スキー大会高等科の部、第3回教員スキー競技大会が予定されている。(註:S5,1,18)
2月2日	北陸毎日新聞社主催の石川県下小児児童スキー大会が開かれる予定。(註:S5,1,18)
2月9日	輪島舞第一部教員体育連盟主催のスキー大会が輪島スキー場で開かれる予定。(註:S5,2,6)
2月15・16日	輪島舞第一部教員体育連盟主催で風至郡、三井村においてスキー大会を開催する予定。(註:S5,2,6)
2月23日	石川県鶴来町体育協会主催の第2回県下学童スキー大会が鶴来スキー場後高スロープで開催される。(註:S5,2,25)
昭和6年 1月29日	金沢市長町小学校のスキー運動大会が大乗寺山で開かれる予定。(註:S6,1,28)
1月31日	石川郡内村白山小学校において学童スキー大会が開かれる。(註:S6,2,5)
1月31日	金沢スキー協会主催の第4回小学校児童スキー競技大会(小学校尋常科男子4年以上、女子5年以上)が大乗寺山スロープで開かれる予定。(註:S6,1,29)
2月1日	金沢スキー協会主催の第4回小学校児童スキー競技大会(高等科)が大乗寺山スロープで開かれる予定。(註:S6,1,29)
2月1日	金沢教育会主催で市小教員のスキー競技大会が開かれる予定。(註:S6,1,29)
2月1日	栗津温泉スキー倶楽部では栗津スキー場にてスキー競技大会を開催する予定。(註:S6,1,28)
2月2日	石川県鶴来体育協会、青年団合同主催の町民スキー大会が小原スロープで開かれる。(註:S6,2,5)
2月8日	金沢市高等科児童スキー大会が大乗寺山で開かれる。(註:S6,2,9)
2月8日	金沢市内小学校教員スキー競技大会が大乗寺山で開かれる。
2月15日	石川県体育協会及び石川県鶴来町主催の第3回近県スキー競技大会が小原、

昭和7年 1月24日	後高スロープで開かれる。(註:S6,2,11)
1月24日	栗津温泉スキー倶楽部では栗津大王ヶ丘スキー場で北日本スキー大会を開催する予定。(註:S7,1,19)
1月29日	全日本スキー競技大会石川予選が行われる。(註:p341)
昭和8年 1月29日	金沢市高等科児童スキー大会、教員スキー大会が卯辰山スキー場で開かれる予定。(註:S8,1,29)
1月29日	全日本スキー選手権大会及び第4回近県スキー競技大会が鶴来スキー場で開かれる。(註:S8,1,31)
2月4日	金沢市女子小学生スキー大会が大乗寺山で開かれる。(註:S8,2,4)
2月5日	能美郡根上村体育研究会主催のスキー競技大会が根上スロープで開かれる。(註:S8,2,9)
2月8日	石川郡市原小学校のスキー大会が五萬堂スロープで開かれる。(註:S8,2,11)
2月9日	石川郡白山小学校スキー大会が小原スロープで開かれる。(註:S8,2,11)
2月12日	山中温泉スキー倶楽部主催の第3回北陸3県スキー大会が山中温泉栢野スキー場で開かれる。(註:S8,2,14)
2月12日	栗津温泉スキー倶楽部では栗津温泉スキー場で石川県下スキー大会を開く予定。(註:S8,2,7)
2月19日	輪島スキー倶楽部では一本松スキー場閉きと兼ねスキー大会を開く予定。(註:S8,2,14)
3月2日	石川県鶴来体育協会、青年団合同主催の第3回スキー運動大会が小原スロープで開かれる。(註:S8,3,4)
昭和9年 1月21日	第7回明治神宮スキー競技石川県予選、第12回全日本スキー選手権予選、第5回近県スキー競技大会が鶴来スキー場で開かれる。(註:S9,1,21)
1月28日	金沢郵便局主催のスキー大会が栗ヶ崎スキー場で開かれる。(註:S9,1,29)
2月4日	石川県能美郡栗津温泉スキー倶楽部主催の第3回県下スキー競技大会が栗津温泉大王ヶ丘スキー場で開かれる。(註:S9,2,5)
2月10日	金沢市内高等小学校スキー競技大会が向山スキー場で開かれる。(註:S9,2,10)
2月11日	石川県鶴来体育協会、青年団主催の第4回スキー運動大会が町宮鶴来スキー場で開かれる。(註:S9,2,13)
2月14日	金沢市小学校尋常科児童のスキー競技大会が大乗寺山で開かれる。(註:S9,2,16)
3月17日	鹿島郡越路小学校主催、北國新聞社後援の鹿島郡学童第1回スキー大会が原山スキー場で開かれる。(註:S9,3,20)
昭和10年 1月24日	県立金沢商業学校では大乗寺山スキー場でスキー大会を開く予定。(註:S10,1,23)
1月27日	全日本スキー選手権大会石川地方予選近県スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。(註:S10,1,28)
1月28日	全日本スキー選手権石川地方予選ジャンプ競技が卯辰山で行われる。(註:S10,1,29)
2月3日	小松ホワイトベーススキー倶楽部主催の能美、江沼両学童スキー競技大会が開かれる。(註:S10,2,5)
2月9日	金沢高等小学校女子スキー大会、教員スキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる。(註:S10,2,10)
2月15日	石川県鶴来体育協会主催のスキー運動大会が小原スロープで開かれる。(註:S10,2,17)
2月16日	能美郡島越小学校では能美、石川2郡派選手のスキー大会を開く予定。(註:S10,1,30)
2月17日	山中温泉山中スキー倶楽部主催の第5回北陸3県スキー大会が栢野スキー場で開かれる予定。(註:S10,2,6)
2月22日	鹿島郡越路村小学校主催の第2回鹿島郡学童スキー大会が原山スキー場で開かれる。(註:S10,2,27)
昭和11年 1月18日	全日本スキー選手権大会兼明治神宮競技スキー大会石川県地方予選第1日目純ジャンプ、複合ジャンプ競技が金沢市向山ジャンプツェで行われる。(註:S11,1,19)
1月19日	第8回明治神宮体育会スキー競技予選及び第14回全日本スキー選手権大会予選、第7回近県スキー競技大会が鶴来スキー場で開かれる。(註:S11,1,20)
1月26日	能美郡中海小学校主催、能美郡第六部教育研究会中海村体育協会後援で第1回児童スキー大会が開かれる予定。(註:S11,1,25)
1月27日	津幡小学校で校内スキー大会、他校選手との競技大会が開かれる予定。(註:S11,1,25)
2月2日	辰口スキー倶楽部主催の第1回石能二郡学童スキー大会が開かれる。(註:S11,2,4)
2月2日	風至郡三井村三井スキー倶楽部主催のスキー競技大会が谷ヶ谷スキー場で開かれる。(註:S11,2,8)
2月4日	山中町小が校主催の第4回校内スキー競技大会が栢野スキー場で開かれる。(註:S11,2,8)
2月5日	輪島中学校において第1回スキー大会が輪島久手川スキー場で開かれる。(註:S11,2,9)
2月5日	金沢第一高女の全校スキー競技大会が栗ヶ崎砂丘で開かれる予定。(註:S11,2,4)
2月6日	石川県鶴来小学校の第6回スキー大会が小原スロープで開かれる。(註:S11,2,11)
2月6日	金沢市日市城高等小学校の第6回スキー競技大会が卯辰山スキー場で開かれる予定。(註:S11,2,7)

2月7日	金沢市日7尋常小学校のスキー大会が大乗寺スロープで開かれる。 (注:S11,2,8)
2月7日	鹿島郡矢野小学校尋常3年以上のスキー大会が嶺山麓スキー場で開かれる。 (注:S11,2,9)
2月8日	金沢市全市小学校教員スキー大会が大乗寺山で開かれる。(注:S11,2,9)
2月8日	金沢市金支局のスキー大会が大乗寺山スロープで開かれる。(注:S11,2,9)
2月9日	小松ホワイトベアスキー倶楽部主催の第4回能美郡学童スキー大会が栗津温泉スキー場で開かれる。(注:S11,2,12)
2月10日	能美郡山上村宮竹小学校の児童スキー競技会が山上村大字大田山スロープで開かれる。(注:S11,2,14)
2月11日	金沢地方専売局の第3回局内スキー大会が大乗寺山で開かれる予定。 (注:S11,2,4)
2月13日	石川郡白山小学校のスキー大会が鶴来スロープで開かれる。(注:S11,2,15)
2月13日	鹿島郡越路小学校主催、北國新聞社七尾支局後援の第4回学童スキー大会が嶺山スキー場で開かれる。(注:S11,2,15)
2月15日	石川郡鶴来体育協会主催の第5回町民スキー運動会が小原スロープで開かれる。 (注:S11,2,18)
2月16日	石川郡鶴来小学校及び体育協会主催の第1回近県学童スキー大会が鶴来町スキー場で開かれる。(注:S11,2,18)
2月16日	石川県能美郡栗津青年会主催、栗津温泉スキー倶楽部、栗津温泉振興会後援で県下スキー大会が栗津スキー場で開かれる予定。(注:S11,2,12)
2月16日	蓮堂スキー倶楽部主催の金沢市民アマチュアスキー大会が向山スキー場で開かれる予定。(注:S11,2,12)
2月21日	飯田高等女学校では嶺山スキー場においてスキー大会を開く予定。 (注:S11,2,21)
2月22日	輪島高等女学校では三井スキー場においてスキー大会を開く予定。 (注:S11,2,15)
2月23日	山中温泉スキー倶楽部主催の第6回江能二郡学童スキー競技大会が山中温泉栢野スキー場で開かれる。(注:S11,2,27)
3月1日	山中温泉スキー倶楽部主催の第7回近県スキー競技大会が山中温泉栢野スキー場で開かれる。(注:S11,3,4)
3月15日	輪島、三井両スキー倶楽部主催の全県登スキー大会が高洲山で開かれる予定。 (注:S11,3,10)
3月21日	石川県体育協会主催のスキー大会が医王山及びその付近のスロープで開かれる予定。 (注:S11,3,20)
3月29日	湯涌温泉スキークラブ主催の第1回スキー大会が湯涌温泉スキー場で開かれる。 (注:S11,3,31)
昭和12年	
1月24日	第15回全日本スキー選手権大会予選兼石川県スキー大会が佛ヶ野スキー場で開かれる。(注:S12,1,27)
2月15日	能美郡小原小学校のスキー競技会が瀬戸平スロープで開かれる。 (注:S12,2,20)
2月17日	山中町小学校では山中温泉栢野スキー場で同校尋常4年以上の児童による第5回学童スキー競技会を開く予定。(注:S12,2,17)
2月17日	石川郡鶴来小学校では小原スキー場で校内スキー大会を開く予定。 (注:S12,2,17)
2月21日	石川郡鶴来体育協会及び鶴来小学校主催の第2回近県学童スキー大会が開かれる予定。(注:S12,2,21)
2月21日	小松ホワイトベアスキー倶楽部主催の江能二郡学童スキー大会が遊泉寺スキー場で開かれる予定。(注:S12,2,20)
昭和13年	
1月23日	第9回明治神宮スキー選手権大会、第16回全日本スキー選手権大会石川地方予選兼第9回近県スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。(注:S13,1,24)
1月23日	能美郡阿ノスキー倶楽部では阿ノスキー場で県下スキー大会を開く予定。 (注:S13,1,18)
1月25日	津幡校主催の郡内児童スキー大会が同校スキー場で開かれる。(注:S13,1,27)
2月4日	金沢市馬場小学校のスキー大会が卯辰山スキー場で開かれる。(注:S13,2,5)
2月9日	金沢市高等小学校児童スキー大会が卯辰山スキー場で開かれる。 (注:S13,2,10)
2月13日	越路小学校主催の第5回郡内スキー大会が原山スキー場で開かれる予定。 (注:S13,2,2)
2月19日	金沢市小学校高等科女児童スキー大会、金沢市小学校教員スキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる。(注:S13,2,20)
昭和14年	
1月21日	第17回全日本スキー選手権大会石川地方予選兼第10回近県スキー大会の純ジャンプ、複合ジャンプ競技が卯辰山スキー場で行われる。(注:S14,1,22)
1月22日	第17回全日本スキー選手権大会石川地方予選兼第10回近県スキー大会第2日が鶴来スキー場で開かれる。(注:S14,1,23)
2月5日	能登地方国防スキー体育大会が鳳至郡柳田村天池スキー場を中心として開かれる。(注:S14,2,8)
2月16日	金沢市小学校尋常科4、5、6年男女1500名参加のスキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる。(注:S14,2,17)
2月22日	能美郡阿尾村西尾小学校のスキー競技会が彼佐羅地内峠谷において開かれる。 (注:S14,2,23)
昭和15年	
1月17日	金沢郵便局のスキー大会が大乗寺山で開かれる予定。(注:S15,1,17)
1月20日	第10回明治神宮国民体育大会スキー石川県予選第1日が卯辰山スキー場で開かれる。(注:S15,1,21)
1月21日	第10回明治神宮国民体育大会スキー石川県予選第2日が大乗寺山スキー場で

1月21日	開かれる。(注:S15,1,27)
1月21日	石川県体育協会主催の国防スキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる。 (注:S15,1,22)
1月28日	明治神宮国民体育大会警防団スキーの部石川予選が大乗寺山で開かれる。 (注:S15,2,1)
2月4日	鹿島郡越路校主催の第7回学童スキー大会が原山スキー場で開かれる予定。 (注:S15,1,25)
2月13日	金沢市内高等科男子学童スキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる。 (注:S15,2,14)
2月14日	金沢市内小学校尋常科児童スキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる。 (注:S15,2,15)
2月16日	能美郡国府村内各小学校連合会の能美郡教育研究会第六支部内各小学校学童スキー大会が遊泉寺スキー場で開かれ予定。(注:S15,2,14)
2月17日	金沢市小学校高等科女児童スキー大会、金沢市小学校教員スキー大会が大乗寺山で開かれる予定。(注:S15,2,3)
2月17日	石川県能美郡御幸村今江小学校のスキー大会が準野スキー場で開かれる。 (注:S15,2,20)
2月17日	石川郡越路小学校では小原スキー場で同校のスキー大会を開く予定。
2月25日	栗津温泉スキー倶楽部主催の第5回石川県下スキー大会が栗津温泉スキー場で開かれる。(注:S15,2,27)
3月10日	鶴来体育協会、北國新聞社共催、第九回栢野後援の近県スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。(注:S15,3,11)
昭和16年	
1月19日	石川県体育協会、金沢スキー協会共催の第3回国防スキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる予定。(注:S16,1,16)
1月25日	第11回明治神宮冬季大会スキー石川県予選会と同時に加賀地方国防スキー大会が卯辰山、大乗寺山スキー場で開かれる予定。(注:S16,1,16)
2月9日	北國新聞社主催、金沢栢野後援の近県スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。 (注:S16,2,10)
2月14日	金沢市小学校教育研究会主催の学童スキー大会(尋常科4年以上)が開かれる予定。(注:S16,2,5)
2月15日	金沢市小学校教育研究会主催の学童スキー大会(高等科)が開かれる予定。 (注:S16,2,5)
昭和17年	
1月17日	明治神宮冬季体育大会石川予選第1日が大乗寺山スキー場で開かれる。 (注:S17,1,18)
1月18日	明治神宮冬季体育大会石川予選第2日が卯辰山スキー場で開かれる。 (注:S17,1,19)
1月23日	金沢商業学校では大乗寺山スキー場で全校生徒参加のスキー大会を開く予定。 (注:S17,1,27)
2月1日	石川県社会教育科主催の県庁員スキー鍛錬大会が大乗寺山スキー場で開かれる予定。(注:S17,1,25)
2月15日	鶴来町体育協会、北國毎日新聞社主催、金沢栢野、石川県後援の第3回スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。(注:S17,2,17)
昭和18年	
1月23日	第13回明治神宮国民体育大会冬季大会石川予選石川県冬季錬成大会第1日が大乗寺山スキー場で開かれる。(注:S18,1,24)
1月24日	第13回明治神宮国民体育大会冬季大会石川予選石川県冬季錬成大会第2日が卯辰山スキー場で開かれる。(注:S18,1,31)
2月8日	金沢市内国民学校初等科5、6年の雪滑り軍大会が卯辰山で開かれる。 (注:S18,2,11)
2月9日	金沢市内国民学校高等科女児の雪滑り軍大会が卯辰山で開かれる。 (注:S18,2,11)
2月12日	金沢市内国民学校高等科男子の雪滑り軍大会が開かれる予定。 (注:S18,2,11)
2月14日	小松スキー倶楽部主催の県下学童スキー大会が能美郡国府村遊泉寺スキー場で開かれる。(注:S18,2,16)
2月16日	金沢市北越新市域(註江、穀月、湯津、栗崎、大野)5国民学校連合のスキー大会が栗崎砂丘のスキー場で開かれる。(注:S18,2,17)
2月16日	金沢鉄道管理事務所主催のスキー大会が大乗寺山スキー場で開かれる予定。 17日
2月17日	石川郡吉野国民学校のスキー大会が五萬堂高地で開かれる。 (注:S18,2,20)
2月21日	大日本学徒体育振興会支部、鶴来町体育協会、北國毎日新聞社共催の第4回近県スキー大会が鶴来スキー場で開かれる。(注:S18,2,22)
昭和19年	
昭和20年	
昭和21年	
1月20日	北國毎日新聞社主催の石川県スキー大会が開かれる。(注:S21,1,21)

() 内は参考資料

北：北國新聞

北海：北國毎日新聞

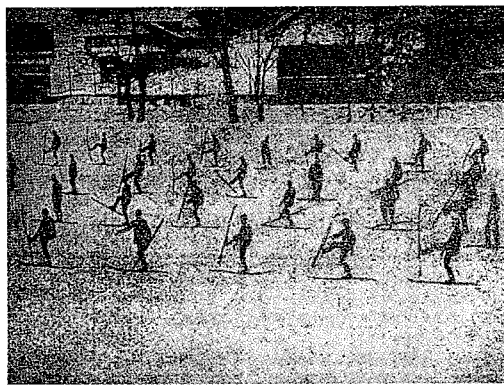
北の都：『北の都に秋たてて』¹⁰⁾

三中五十年：『金沢三中・桜丘高校五十年史』¹⁵⁾

大正11年12月には金沢高等工業学校が同校校庭付近の上野射的場裏の好スロープでスキー練習を行った⁹⁶⁾。また、大正13年1月には、七尾中学生がスキー練習を実施している。学生の中でのスキー熱は次第に高まりを見せ、大正15年には「医大四高生らの学生をはじめ多数のスキーマンは思ひ思ひのスキー場さして出かけ近郊大乗寺山には女師と二高女の二百名をはじめ男女あはせて四百余名が土曜の半日をウインタースポーツを享楽して引き上げた」⁹⁷⁾とある。

昭和になると金沢を中心としたスキー熱が、教育界に明確な形で現れ、学校体育のカリキュラムとして位置づけられるようになる。昭和2年12月、金沢市の小学校において冬季の小学校体育として一斉にスキー指導が実施されることが決定された⁹⁸⁾。スキーが冬季に適切な体育の教材として認められたのである。

また、同年、金沢三中がスキー部を設置、第1回校内スキー大会が開催された⁹⁹⁾。昭和3年には、小將町校で初めてスキー体操が公開されている¹⁰⁰⁾。〔図10〕昭和6年には、七尾高等女学校においてグラウンドに雪を積み上げたスキーコースが作られ、約400名の女学生がスキーの練習を行っている¹⁰¹⁾。このように、各学校で自らスキー練習場を作るところも見られるようになる。なお、昭和6年12月に金沢スキー協会が金沢市内各小学校児童のスキー所有状況を



〔図10〕小將町校のスキー体操
(北國新聞 昭和3年2月10日)

調査した結果によると、金沢市内の児童の中で、男子は48.4%、女子は21.7%のスキー所有が見られた¹⁰²⁾。(資料5参照)男子においては児童の約2人に1人がスキーを所有しており、小学生にも確実にスキーの普及が見られる。

以上のように、金沢市の諸学校をはじめ県内各地の学校においてスキー練習が盛んに行われるようになり、教育界におけるスキー活動が普及していく過程が見て取れる。

4. 第九師団におけるスキー活動

大正10年頃までは、第九師団が中心となり石川県のスキー活動を行ってきた。先に述べたように石川県にスキーが導入された当初は、第九師団が師団内に軍事目的でスキーを取り入れるとともに、民間側に対してスキー普及のために働きかけ、県内では官民一体のスキー活動が展

資料5 金沢市内小学校別男女スキー所有者率

	尋常科		高等科		
	男	女	男	女	
野町	51.9 %	22.8 %	小將	81.1 %	—
十一屋	38.8	16.0	高岡	—	24.4 %
新壜	60.1	34.4	菊川	63.8	—
菊川	35.4	25.8			
石引	46.1	22.5			
材木	52.4	—			
味噌蔵	—	25.8			
松ヶ枝	64.2	31.9			
長町	56.6	32.0			
長土堀	47.7	14.2			
芳齋	37.8	11.7			
瓢箪	46.0	21.8			
此花	36.4	12.1			
諸江	33.3	11.7			
馬場	51.4	20.6			
森山	35.0	14.7			

(北國新聞 昭和6年12月22日夕刊より)

開されてきた。その当時、第九師団のスキー活動も、まだ本格的な軍隊演習には至らず、師団内のスキー愛好家たちがスキーを楽しむといったものであった³⁰⁾。

しかし、昭和初期にかけて次第に第九師団のスキー活動は本格的な軍隊形式で実施されるようになる。その活動は次のように報告されている。「金沢衛戍各隊では将校下士卒達各自が思ひひにスキーを抱へて滑つてゐたが段々団体的な合理的な練習が自然に欲求されて各隊では頃日来大々的な練習計画を建て雪の来るのを集つてゐたが愈お誂へ向きに降つて第九大隊を真先にして猛烈な軍隊式な練習が開始されることになつた。」¹⁰³⁾このように、第九師団のスキー活動は、大正10年頃から昭和初期にかけて、次第に戦時下への突入が間近になるにつれ合理的なスキー演習が求められ、民間のスキー活動とは目的も異なり、民間からはほとんど遠ざかり第九師団独自の活動が行われるようになっていく。

しかし、一部ではあるが第九師団が民間との協力でスキー活動を行っている事例が確認できる。大正15年1月31日に開催された、富山県東砺波郡青年団と城端スキークラブ、城端青年団が立野ヶ原で主催した北陸スキー競技会の後援として第九師団が協力している¹⁰⁴⁾。第九師団はこの時ちょうど立野ヶ原の第九師団演習地において演習を行っていた。〔図3〕師団内からも隊員が何名かこの大会に参加している¹⁰⁵⁾。このように、第九師団が民間のスキー大会を後援するという形で協力しており、この他にも昭和15年3月及び昭和16年2月の近県スキー大会、昭和17年2月の第3回スキー大会等に後援という立場で協力している例が見られる¹⁰⁶⁾。が、これらの大会に具体的にどのような協力活動を行ったかまでは明らかでない。

5. 県内におけるスキー用具の製造

昭和初期の石川県内におけるスキーの販売台数から見ると、当時のスキー普及の勢いがうか

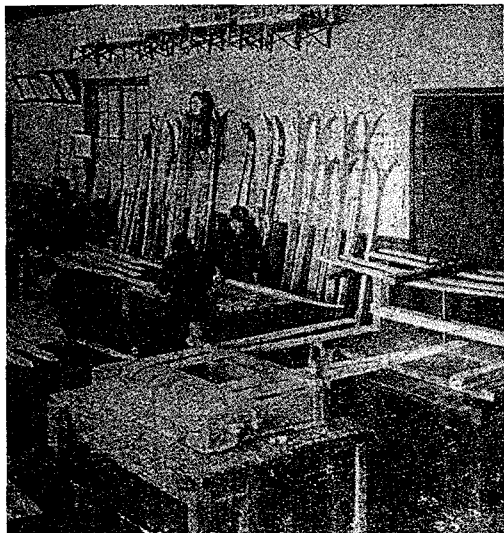
がえる。昭和6年1月には「石川県下スキー店では約五千臺のスキーを仕入れて一儲けを目論んでゐたが十日来の雪に各スキー店のスキーは素晴らしい売行きを示した、金沢市内宇都宮、堀田、吉川向店で各一日に約百臺を売飛ばし今シーズンに入つての売行きは縣下で約三千臺といふ豪勢さで」¹⁰⁷⁾あったようである。学生や一般、そして軍隊等、利用者は様々であったが、県内でこのように膨大な数のスキーが販売されていたことは、スキー普及が驚くべき勢いで進んだことを物語っていよう。石川県において使用されたスキーは、導入期普及期ともにそのほとんどが他地域で製造され石川県内の道具店で購入されたものであった。「宇都宮は十三圓から廿四五圓、堀田は十三圓五十銭から内地製では二十九圓位迄外国製は堀田では四十七圓位から五十五六圓位まで」¹⁰⁸⁾と、当時の一世帯の1ヶ月の実収入が約110円¹⁰⁹⁾であったことを考えると、スキーは高価な物品であり、特にスキーを盛んに行っていた学生や学校生徒・児童にとっては簡単に手に入る物ではなかったであろう。そのため堀田店では児童用スキーを三円五十銭から五円くらいまでの三種に分けて売り出しており¹⁰⁸⁾、児童用は幾分安価で手に入ったようである。

スキーは県外から購入したものがほとんどであったと思われるが、僅かながら石川県内でスキーが製造されていた事実が確認できる。昭和3年12月に金沢市小將町小学校においてスキーが作られている。「高田市出身の金澤市小学校スキー指導員、小川小將町校訓導は市内小学校児童のスキー熱勃興にかんがみ小將町校にスキー製作機を一臺備へつけ数日前より工業科児童の作業教育にかね教師児童総がかりをもつて製作に努力中で出来榮は極めて良好である」¹¹⁰⁾とある。〔図11〕

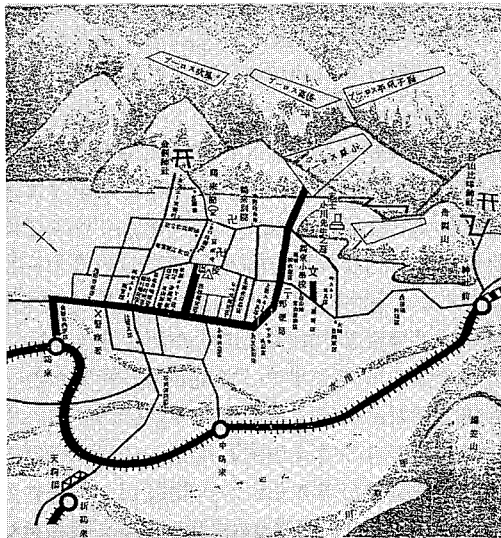
また、昭和4年には石川郡鶴来町に「鶴来スキー製作所」が存在しており、石川県内の製作所でスキーが作られていた。「鶴来スキー製作所目名商会」と称する製作所がスキーを作り、

地元の林スキー用具店、上田スキー用具店等の用具店がスキーの販売を行っていたようである¹¹¹⁾。〔図12、13〕しかし、石川県内で当時

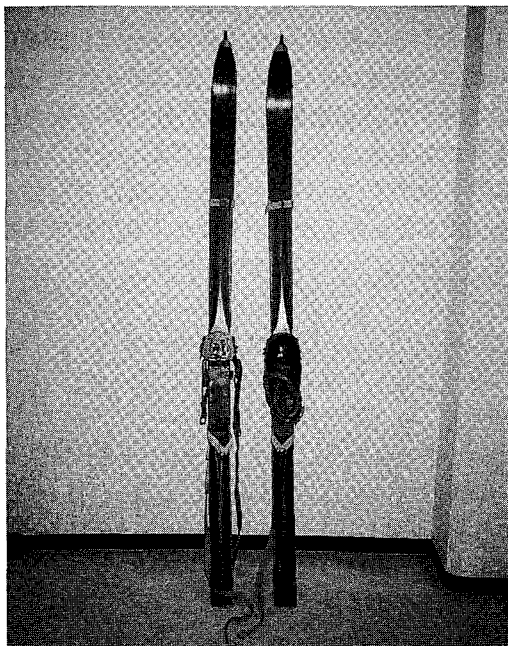
使用されていたスキーのほとんどは新潟県高田産で、全販売高の8割を占めていたようである。残りの2割は北海道や信州飯山付近で製造



〔図11〕小將町校におけるスキー製作
（北國新聞 昭和3年12月21日）



〔図13〕鶴来スキー場案内
（鶴来町立博物館所蔵）



〔図12〕昭和初期鶴来において製造されたスキー
（鶴来町立博物館所蔵）

された物であった¹¹²⁾。従って、県内鶴来産のスキーは、ほとんど出回っていなかったと推測される。が、昭和7年には金沢で産業と観光の全国大博覧会が開催され、そこで鶴来のスキーは優良国産品として評価されている¹¹³⁾。

さらに、昭和18年になると金沢市崎浦国民学校校長藤井安司によって木製のスキー締め具が作られる¹¹⁴⁾。〔図14〕藤井のスキー締め具は「竹片、木片のため非常に軽快で安価なばかりでな



〔図14〕藤井安司考案の木製スキー締め具
（北國新聞 昭和18年1月12日）

くスキーとの接合が踵の穴によつてなされるため靴の左右動を完全に防ぐことが出来るので堅牢なスキー靴が不要であり普通のゴム靴や藁靴でも充分使用出来¹¹⁴⁾、高価なスキー用具に対して、安価で入手しやすい物であった。そして、この藤井考案のスキー締め具は、金沢刑務所で製作され市場に出回ることが伝えられていた¹¹⁴⁾。また、昭和19年には、藤井はスキー板の裏に装着させる藁製のシートをも考案し、特許を取ったとある¹¹⁵⁾。

このように、僅かではあるが、県内においてスキー用具の製造が行われていたことが明らかになっている。小学校の工業科児童の作業教育にスキー製造が利用されたり、鶴来町の製作所でスキーが製造されていたこと、個人によってより安価なスキー用具が考案され市場に出回ったこと等は、石川県内においてもスキー製造が地方産業として着目されていたことを示唆している。

6. 戦時下におけるスキー活動

昭和14年頃になると、県内のスキー活動に戦争の影響が現れてくる。昭和14年2月7日、河北郡津幡高等女学校は石動へ向けて雪中耐寒行軍を実施、また、同日、石川県立小松女学校は御幸村字串地内の石川県種畜場方面に遠足し、スキー練習を行っている。が、これらの活動はともに、日本精神発揚週間中の行事として実施されている¹¹⁶⁾。また、同年、柳田地方の小学生が参加する能登地方国防スキー大会が開催されている。この大会で実施された競技には、小学生が4kgの藁製背囊を背負い2kmをスキーで走破し優劣を競うという種目も見られる¹¹⁷⁾。このように、スキー大会の名称に「国防」という言葉が組み込まれたり、競技種目に心身の鍛錬を目的とした種目が加わったり、学校において精神鍛錬の目的でスキー練習が行われるようになったことには、戦時色が濃くなって行くにつれ、スキーが国民の心身鍛錬の手段としても利用されるようになってきた影響が見られる。

そして、昭和16年以後、確認されるスキー活動は一気に減少する。昭和20年になると「金沢市内の各運道具店では在庫品もほとんど皆無といふ心もとない現状だ、これは戦時中民間用は一切製造禁止となつてゐたため¹¹⁸⁾」というように、民間の人たちに対するスキー製造が禁止され、戦時中のスキー活動も大きく抑制されることとなる。このように、大正10年以降普及の一途をたどってきた石川県内のスキー活動も戦争の影響で一時的に停滞する。

が、終戦翌年の昭和21年3月、石川県では全県下のスキークラブを統括し、スキーの健全なる普及を目指そうと「石川県スキー連盟」が誕生する¹¹⁹⁾。これ以後、県内のスキー活動は再び活発になり、新たな発展が見られるようになる。

ま と め

以上のことから、石川県のスキー活動は、大きな流れでとらえると、第九師団という軍隊によって教育関係者を中心とした民間への普及が試みられ、講習会やスキー大会、各学校でのスキー練習など、教育関係者の積極的な普及活動によって県内各地へスキーが普及されていった。

軍隊と教育関係者がともに石川県のスキー活動史において中心的な役割を担ってきたのである。また、特にスキーの導入期において金沢市内の女学校生徒が活発にスキー活動を行っていたことは石川県の特徴であるといえる。

さらに、石川県のスキー活動の中心となった場所は、白峰村等の地方山間部ではなく、金沢市であった。これは、石川県教育界の中心が金沢市にあり、石川県師範学校・第四高等学校・女子師範学校・高等女学校等多くの学校が集中していたこと、第九師団が活動していたこと、また、郵便局など都市機能が集中していたこと等がその背景として考えられるだろう。

註及び引用・参考文献

註1) 昭和15年7月から、北國新聞社と北陸毎日新聞社の合併により新聞名が北國新聞から北國毎日新聞となる。以後、昭和24年12月まで北國毎日新聞として発刊され、昭和25年1月から再び北國新聞として発刊される。

註2) 松原伝吉が石川県にスキーを伝えたことは、山崎の著書²⁾の中で「本県能美郡白峰郵便局長松原伝吉氏は単独高田に赴いてスキー術を習得して帰り、これを実地に採用して郵便物発送に供してから、同方面は急激なる勢いを持ってスキーの普及を見た」と述べている。この内容によると松原伝吉はあたかも自分から単独で高田に赴いたようにとれるが、実際には松原は金沢郵便局からの指令を受けて、利賀局事務員浦辻氏とともに講習に参加している。また、山崎は松原伝吉が高田へ行った年を大正10年頃としているが、これは明らかな間違いであり、実際は大正5年である。(北國新聞 大正4年12月25日朝刊3面より)

註3) 山崎の著書²⁾によれば、医王山遭難事件が起こったのは大正11年であるとされている。しかし、実際は大正9年であり、これも年代設定の誤りである。(北國新聞 大正9年2月16日朝刊3面より)

註4) 山崎は、石川県師範学校長中山文雄が新潟県より転任してすぐの大正5年頃にスキー数台を購入し、生徒の有志にスキーを練習させたと述べ、これが石川県におけるスキーの本当の濫觴であるとしている。が、中山文雄が転任してきたのは明治44年であり、また、大正5年の師範学校でのスキー練習活動は史料の上で確認できないことから、この山崎の年代設定及び記述は信憑性に欠けると言える。(石川県師範学校 中山文雄履歴より)

- 1) 入江史郎, 今野陸夫, 渡辺長治: 軍隊とスキー—スキー年鑑(1925~1943)より—, 防衛大学校紀要 社会科学分冊 66巻, 1993, p25
- 2) 山崎紫峰: 『日本スキー發達史』, 朋文堂, 1936, p20
- 3) 酒井繁: 日本のスキー發達に関する一考察 (I)—その渡来と発祥について—, 論叢25巻, 1984, p36

- 4) 石川県スキー連盟50年史編纂委員会編: 『石川県スキー連盟50年史』, 石川県スキー連盟, 1997
- 5) 石川県スキー連盟40年史編纂委員会編: 『石川県スキー連盟40年史』, 石川県スキー連盟, 1987
- 6) 小川勝次: 『日本スキー發達史』, 朋文堂, 1956
- 7) 全日本スキー連盟: 『スキー年鑑』7, pp181~186
- 8) 石川県教育会: 『石川教育』, 第227, 251号, 1923, 1925
- 9) 石川県体育協会: 『石川体育』, 第2~9号, 1927~1935
- 10) 江藤武人, 作道好男編: 『北の都に秋たけて』, 財界評論新社, 1972
- 11) 石川師範同窓会: 『石川師範同窓会百年記念誌—1988—』, 石川師範同窓会, 1988
- 12) 北國新聞社編集局編: 『済美に集う—石川県立金沢第一高女の光陰—』, 北國出版社, 1981
- 13) 園田夕美編: 『石川県立金沢第二高女史真清水の心』, 石川県立金沢第二高等女学校真清水会, 1985
- 14) 金沢一中・泉丘高校七十年史編集委員会編: 『金沢一中・泉丘高校七十年史』, 北國籍, 1963
- 15) 北國新聞編集局編: 『三尖塔遙か—金沢二中の半世紀—』, 北國出版社, 1983
- 16) 金沢三中・桜丘高校五十年史編集委員会編: 『金沢三中・桜丘高校五十年史』, 橋本確文堂, 1970
- 17) 石川県立羽咋高校「五十年史」編集委員会編: 『羽咋中学・女学校・高校五十年史』, 石川県立羽咋高校五十周年記念事業委員会, 1972
- 18) 白峰村教育委員会編: 『私たちの白峰村』, 白峰村教育委員会, 1987
- 19) 鳥越村史編纂委員会編: 『石川県鳥越村史』, 石川県石川郡鳥越村役場, 1972
- 20) 北國新聞, 大正4年(1915)12月25日朝刊3面
- 21) 北國新聞, 大正5年(1916)2月29日朝刊3面
- 22) 『私たちの白峰村』前掲書, p46
- 23) 北國新聞, 大正8年(1919)1月29日朝刊3面

- 24) 北國新聞, 大正8年(1919) 2月11日朝刊4面
- 25) 北國新聞, 大正7年(1918) 1月17日朝刊4面
- 26) 石川縣師範学校 中山文雄履歴, 金沢大学教育学部蔵
- 27) 『日本スキー發達史』前掲書, p310
- 28) 北國新聞, 大正7年(1918) 1月12日朝刊3面
- 29) 北國新聞, 大正8年(1919) 12月23日朝刊4面
- 30) 北國新聞, 大正9年(1920) 1月17日朝刊4面
- 31) 『日本スキー發達史』前掲書, p27
- 32) 福光町史編纂委員会: 『福光町史』下巻, 福光町, 1971, p1025
- 33) 北國新聞, 大正9年(1920) 1月18日朝刊4面
- 34) 北國新聞, 大正9年(1920) 1月17日朝刊4面
- 35) 北國新聞, 大正10年(1921) 2月1日朝刊5面
- 36) 北國新聞, 大正10年(1921) 2月5日朝刊5面
- 37) 北國新聞, 大正9年(1920) 2月16日朝刊3面
- 38) 北國新聞, 大正9年(1920) 2月15日朝刊4面
- 39) 北國新聞, 大正9年(1920) 2月17日朝刊4面
- 40) 『日本スキー發達史』前掲書, p313
- 41) 同上, p310
- 42) 北國新聞, 大正7年(1918) 1月12日朝刊3面
- 43) 北國新聞, 大正8年(1919) 12月28日朝刊3面
- 44) 北國新聞, 大正8年(1919) 12月27日朝刊3面
- 45) 北國新聞, 大正9年(1920) 1月23日朝刊4面
- 46) 北國新聞, 大正9年(1920) 1月27日朝刊4面
- 47) 『石川県立金沢第二高女史真清水の心』前掲書, p102
- 48) 北國新聞, 大正10年(1921) 2月7日朝刊3面
- 49) 北國新聞, 大正10年(1921) 1月15日朝刊3面, 18日朝刊4面, 19日朝刊4面, 20日朝刊4面, 22日朝刊4面, 26日朝刊4面
- 50) 北國新聞, 大正10年(1921) 2月7日朝刊3面
- 51) 北國新聞, 大正11年(1922) 1月21日
- 52) 北國新聞, 大正11年(1922) 1月27日
- 53) 北國新聞, 大正11年(1922) 12月19日
- 54) 北國新聞, 大正13年(1924) 1月30日
- 55) 北國新聞, 大正13年(1924) 2月3日
- 56) 北國新聞, 大正13年(1924) 2月9日
- 57) 北國新聞, 大正14年(1925) 1月15日
- 58) 北國新聞, 大正15年(1926) 2月17日5面
- 59) 北國新聞, 昭和2年(1927) 1月7日
- 60) 北國新聞, 昭和2年(1927) 2月20日, 22日
- 61) 北國新聞, 昭和2年(1927) 12月14日
- 62) 北國新聞, 昭和3年(1928) 2月1日
- 63) 北國新聞, 昭和5年(1930) 12月4日4面
- 64) 北國新聞, 昭和4年(1929) 2月26日4面
- 65) 北國新聞, 昭和5年(1930) 1月13日3面
- 66) 北國新聞, 昭和5年(1930) 1月14日
- 67) 北國新聞, 昭和5年(1930) 2月2日
- 68) 北國新聞, 昭和5年(1930) 12月19日
- 69) 北國新聞, 昭和8年(1933) 1月15日
- 70) 北國新聞, 昭和8年(1933) 2月7日, 昭和9年(1934) 2月5日, 昭和15年(1940) 2月27日
- 71) 北國新聞, 昭和8年(1933) 2月7日朝刊6面
- 72) 北國新聞, 昭和9年(1934) 3月8日
- 73) 北國新聞, 昭和10年(1935) 1月30日
- 74) 北國新聞, 昭和11年(1936) 1月21日
- 75) 北國新聞, 昭和10年(1935) 12月20日夕刊, 昭和11年(1936) 1月28日
- 76) 北國新聞, 昭和11年(1936) 1月29日
- 77) 北國新聞, 昭和15年(1940) 12月24日, 昭和16年(1941) 12月23日
- 78) 北國新聞, 大正12年(1923) 1月30日3面
- 79) 北國新聞, 大正11年(1922) 12月19日
- 80) 石川教育, 前掲書 第227号, p38~44
- 81) 石川教育, 前掲書 第251号, p60~65

- 82) 北國新聞, 昭和14年(1939) 1月7日
 83) 北國新聞, 昭和8年(1933) 1月27日
 84) 北國新聞, 昭和8年(1933) 1月31日
 85) 北國新聞, 大正11年(1922) 1月20日朝刊
 5面
 86) 北國新聞, 大正15年(1926) 1月27日
 87) 北國新聞, 大正15年(1926) 2月4日
 88) 『済美に集う一石川県立金沢第一高女の光
 陰一』前掲書, 巻頭写真
 89) 石川県体育協会創立50執念記念史編纂委員
 会: 「(財) 石川県体育協会創立50周年記念史
 『大地揺るがす感動』スポーツ石川のあゆ
 み」, 1998, p134
 90) 北國新聞, 大正11年(1922) 1月30日朝刊
 5面
 91) 北國新聞, 大正11年(1922) 2月1日
 92) 『北の都に秋たけて』前掲書, p341
 93) 北國新聞, 昭和3年(1928) 1月21日
 94) 北國新聞, 昭和8年(1933) 1月30日,
 1月31日夕刊2面,
 95) 北國新聞, 昭和8年(1933) 2月4日朝刊
 7面
 96) 北國新聞, 大正11年(1922) 12月24日朝刊
 97) 北國新聞, 大正15年(1926) 1月25日
 98) 北國新聞, 昭和2年(1927) 12月7日
 99) 『金沢三中・桜丘高校五十年史』前掲書, pp
 77~78
 100) 北國新聞, 昭和3年(1928) 2月10日朝
 刊5面
 101) 北國新聞, 昭和6年(1931) 1月17日
 102) 北國新聞, 昭和6年(1931) 12月22日夕
 刊
 103) 北國新聞, 大正12年(1923) 1月18日
 104) 北國新聞, 大正15年(1926) 1月22日
 105) 北國新聞, 大正15年(1926) 2月3日
 106) 北國新聞, 昭和15年(1940) 3月11日朝
 刊3面, 北國毎日新聞, 昭和16年(1941) 2
 月10日朝刊3面
 同, 昭和17年(1942) 2月17日夕刊
 107) 北國新聞, 昭和6年(1931) 1月16日
 108) 北國新聞, 大正11年(1922) 12月12日朝
 刊
 109) 総務庁統計局, 日本長期統計総覧第4巻,
 日本統計協会, 1988, p74
 110) 北國新聞, 昭和3年(1928) 12月20日夕
 刊2面
 111) 鶴来町立博物館所蔵, 「鶴来スキー場案
 内」
 112) 北國新聞, 昭和4年(1929) 2月16日朝
 刊5面
 113) 『石川県スキー連盟40年史』前掲書,
 p233
 114) 北國毎日新聞, 昭和18年(1943) 1月12
 日3面
 115) 北國毎日新聞, 昭和19年(1944) 1月30
 日
 116) 北國新聞, 昭和14年(1939) 2月8日朝
 刊
 117) 北國新聞, 昭和14年(1939) 2月8日朝
 刊3面
 118) 北國毎日新聞, 昭和20年(1945) 12月9
 日
 119) 北國毎日新聞, 昭和21年(1946) 3月19
 日

附 記

スキーはわが国スポーツ史上、もっとも短期間に全国の積雪地域に普及を見た種目である。本研究で取り扱った石川県でいえば、明治44年に新潟県高田市の高田十三師団にレルヒが指導してから、ほぼ10年後の大正9年から10年頃には郵便局、軍隊、学校、などで活発にスキーが行われるようになっていく。上越信越地域ではもっと早く、数年を経ずして「越信スキークラブ」の誕生を見ているほどである。

スキーはなぜこのようにいち早く普及したのであろうか。それはスキーがわが国の積雪地帯の人々の冬の生活に一大変化をもたらしてくれる可能性を秘めた新しい用具であり技術だからである。冬の雪上移動を容易にしたばかりでなく、場合によっては高速の移動を可能にし、快適で、安価で、しかも体育的で、さらに若干の技能修得によってとりあえずは滑走ができ、さらにそれを階梯のように登り詰めていくことの面白さが備わっていたからであろう。雪さえあればどこでも可能なこのスキーは克雪

・利雪の新しい旗手として登場したのである。

このスキーが石川という地域に如何に導入され普及していったかを、本研究は捉えようとした。その際、地域の人々がこのスキーをどういう眼差しで受けとめ、どのような人々がその導入・普及にかかわったのか、スキーによって地域にどのような問題が生まれ、それをどう乗り越えたのかなど、当時の地域の課題や社会の状況がスキーを通じて浮かび上がってくるような構成にしたいと考えた。

本研究の分担について明らかにしておこう。本研究のベースになっているのは、平成9年度金沢大学卒業論文川崎信和「石川県におけるスキーの導入および普及過程に関する研究」である。卒業論文ではあるが決して水準の低いものではない。主として地域紙のスキー記事を2,000項目にわたってマイクロフィルムから採録する地道な作業の中から浮かび上がった史実は、これまでの石川県スキー史の書きかえを必要とするほどのものであった。本研究の基礎資料はこ

の川崎の資料収集に基づいている。

この資料に基づき、幾分事実史的な記述に留まっていた川崎の研究を、スキーが石川の人々や社会にどのように受けとめられ、どのような影響を与えたのかという地域史の観点から、史料を補足し、論を構成し直したのが野中由美子である。したがって、この論文の業績は直接的には川崎信和と野中由美子の二人にほぼ同等の比重で帰せられることになる。

ただし、本論文の最終責任は指導監修にあたった大久保が負うものであることはいうまでもない。

なお、平成9年8月、ゼミの演習をかねて大正12年に行われた鳥越村阿手・尾小屋スキー講習会場跡の現地調査を行った。その際、鳥越村教育委員会教育課長中田宗隆氏、鳥越村阿手区長松本恵次氏にはスキー場跡や尾小屋鉱山跡について案内をいただき、貴重な資料を得ることができた。この場を借りてあらためて深甚の謝意を申し上げたい。(大久保英哲 記)